

NJ素流協 News

平成26年6月10日

第113号

平成26年6月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6（農人会館5階）
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

ノースジャパン素材流通協同組合 第11回通常総会開催

5月22日、盛岡市のホテルメトロポリタン盛岡ニューウイングにおいて、NJ素流協第11回通常総会が開催された。

組合員総数114名のうち本人出席27名、委任状出席16名、書面議決書提出65名、計108名の出席が確認され、横澤孝一副理事長が開会の辞を述べた。

下山裕司理事長は冒頭、「NJ素流協はこれまで様々な課題に直面しましたが、特に3年前の東日本大震災においては、関係者及び組合員の皆様にも大なるご支援を賜りましたことに、重ねて御礼申し上げます。近年我が国の木材需給の構造は大きく変化しており、合板・集成材等エンジニアリングウッドへの急激な転換が進むとともに、素材の供給先が中小工場から大型工場に移行してきています。また再生可能エネルギーの固定価格買取制度により全国各地においてバイオマス発電計画が立てられ、これまで未利用材として扱

われてきた木質バイオマスが新たな需要として発現してきました。NJ素流協は、原木のカスケード利用の推進、連続的森林作業の導入、低コスト再造林システムの開発、情報組織としての一層の充実、触媒的機能の充実を基本姿勢とし、事業運営に努めて参ります。国、県、関係者の皆様と組合員の皆様のご協力とご理解を賜りますようお願い致します」と挨拶した。



続いて来賓の東北森林管理局 黒川正美局長、岩手県農林水産部 小原敏文部長(代理)、佐藤順二林務担当技監、岩手県森林・林業会議 中崎和久理事長(代理)、千田育郎専務理事、(有)川井林業 澤田令代表取締役から御祝辞を頂いた。

続いて組合員の佐々木元氏が議長に選出され議事に入り、提出された10議案全てについて、原案通り承認・決定された。主な議事の内容は次の通り。
▽議案第1号「平成25年度事業報告書及び決算関係書類承認の件」

平成25年度の素材取扱総数量は、合板用針葉樹素材を中心として合計で23万753m³、対計画比89%、対前年比110%である。地域別にみると、岩手県内の被災した合板工場への納入量は、今なお大震災前の約4割にとどまっている。宮城県の合板工場への出荷は、24年度とほぼ同量で安定した販売量となった。一方、西日本の合板工場への販売は、24年度比で76%の販売量となった。製材・集成材用等素材の販売はほぼ前年並みの販売量となったが、秋以降、特に原木の不足状況が続き原木の

調達に苦勞した。また、平成26年度からのバイオマス発電所の本格稼働が決定し、25年度はその素材の販売がスタートした。

教育及び情報提供に関する事業としては、青森を含めた4地区で地区別組合会議を開催したほか、岩手県北地区で計画されているバイオマス発電所への燃料用原木供給について、同地区で組合員会議を開催し説明・協議を行った。経営技術研修会では、路網作設オペレーター養成研修のほか、林業用機械・林業労働安全・低コスト再造林に関する研修、福島県白河市の木質バイオマス発電所の視察研修等を行った。また、中部森林管理局鈴木信哉局長を招き、「我が国における木材の流通と需給動向について」をテーマに林業講演会を開催した。

利用拡大等に関する事業としては、低コスト造林の実行指導として、平成22年度から3カ年実施した「フォレスト再生モデル実証事業」の取りまとめを行い、その結果を各種報告会等で報告した。また組合員の生産した素材について、ウェブ入札による販売を行っ

た。また国産材の利用拡大を一層推進するため、国産材利用拡大推進会議を2回開催し、需要工場と供給業者が国や県の指導・助言を受け協議・検討を行った。

受託事業としては、岩手県の「森林整備加速化・林業再生基金事業」流通専門部会の事務局として、流通経費支援事業及び高性能林業機械の導入等についての指導、部会の運営・開催等を行った。また低コスト再造林の実証事業として、(独)森林総合研究所東北支所及び(株)森林環境リアライズからの受託事業を実施し、フォレスト再生モデル実証地の調査、取りまとめを行った。

▽議案第2号「平成26年度事業計画書、収支予算決定の件」
共同販売事業の計画量は、合板用、製材・集成材用素材等計25万4千㎡、木質バイオマス発電用素材3万6千tとする。内訳は表1のとおり。

委託販売事業として、東北森林管理局委託販売業務を行うとともに、組合員の生産した素材のウェブ入札を行う。教育及び情報提供に関する事業として、低コスト造林法など組合員等に関

表2 新役員名簿(三役以外の氏名五十音順、敬称略)

役職名	氏名	所属団体
理事長	下山裕司	(株)イワリン
副理事長	横澤孝一	横澤林業(株)
常務理事	高橋早弓	ノースジャパン素材流通協同組合
理事	石川勝也	(株)昭林
理事	伊藤賢二	丸巳林産(株)
理事	茅森貴三男	岩手県国有林材生産協同組合連合会
理事	田鎖昇	トーア木材(株)
理事	坪晃	青森県国有林材生産協同組合
理事	福士始	青森県森林整備事業協同組合
理事	松田成輝	(有)松田林業
監事	大粒来仁孝	(有)丸大県北農林
監事	高橋清志	高橋木材

表1 平成26年度取扱計画量

区分		計画量
素合板材用	組合員生産によるもの	166,000㎡
	システム販売によるもの	10,000㎡
製材・集成材用素材・その他		78,000㎡
計		254,000㎡
バイオマス発電用素材		36,000 t

する研修会(2回程度)及び森林・林業・林産業に関する講演会(1回)を開催する。また素流協ニュース等の発行、合法木材・発電用バイオマス証明

等の制度及び労働安全等に関する情報提供を行う。技術及び情報の共有に関する事業として、地区別組合員会議及び林業機械・バイオマス搬出等に係る検討会議を開催する。

木質系資源の利用拡大に関する事業としては、木質バイオマス搬出に掛る実証事業、下刈り作業を中心とした低コスト再造林実証事業を行うほか、地域材利用拡大推進会議を開催する。

▽議案第10号「役員改選の件」

新役員は表2のとおり。

レポート

第1回日本伐木チャンピオンシップ in 青森開催される

5月11、12日の両日、青森市のモヤヒルズを会場として、「世界伐木チャンピオンシップ(WLC)2014 第1回日本大会 日本伐木チャンピオンシップ in 青森」(主催：日本伐木チャンピオンシップ実行委員会)が開催された。

WLC(主催：世界伐木チャンピオン協議会)は、1970年に第1回大会が開催され、近年は2年に1回開催されている。2010年クロアチア大会から日本チームが出場しているが、今回初めて予選としての日本大会が開催され、上位入賞者が世界大会に出場することとなった。

競技は、①伐倒②ソーチェン着脱③丸太合せ輪切り④接地丸太輪切り⑤枝払いの5種目について、世界大会に準じたルールにより行われ、作業の速さ・正確さのほか、服装が安全基準を満たしているか等、安全面についても厳しく審査された。

今回の大会には全国から20名が参加し、青森県から4名、岩手県から5名が参加

した。当NJ素流協組合員からは、(尙)丸大県北農林(岩手県)の下平克秋氏、青森県森連の秋田貢氏が参加した。

2日間にわたる競技の結果、ジュニアクラス(24歳未満)第1位、プロフェッショナルクラス第3位までの選手が表彰され、今年9月にスイスで開催される第31回世界大会の出場権を獲得した。入賞者は次のとおり。



枝払い競技

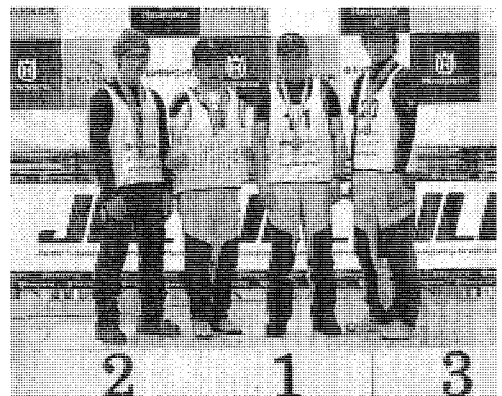
▽ジュニアクラス 第1位 青森県 (尙)マル先先崎林業 先崎倫正氏

▽プロフェッショナルクラス 第1位 青森県 (尙)前田林業 前田智広氏、

第2位 群馬県 多野東部森林組合

今井陽樹氏、第3位 青森県 青森県

森連 秋田貢氏



左から今井氏、前田氏、秋田氏、先崎氏

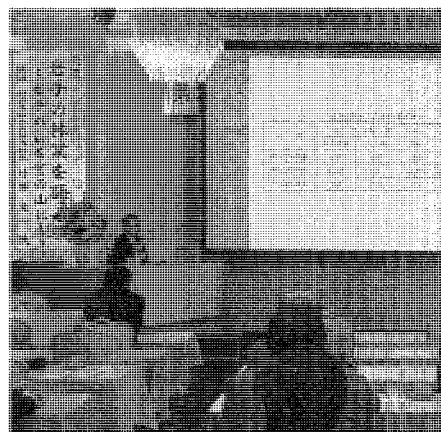
入賞した前田氏、秋田氏は、過去の世界大会の出場経験者である。

社員と共に応援に駆け付けた(尙)丸大県北農林の大粒来社長夫妻は、「レベルの高い大会であり、こうして応援に来られて嬉しい。次回も是非参加したい」と話していた。

岩手県森林土木建設協会定時総会で講演

5月20日、盛岡市のサンセール盛岡において、第30回岩手県森林土木建設協会定時総会が開催され、当NJ素流協の竹田光一氏が「岩手の林業を語る」岩手の山を宝の山に」と題し講演を行った。岩手県の強みである「豊富な資源量と

多様な樹種」「木材生産の実力」「木材産業・木質バイオマス発電所の立地」を生かしての震災からの復興、木材産業の更なる発展を呼びかけた。



山火事多発注意!

本年4月末から5月末にかけて、岩手県内各地で山火事が発生している。被害面積は盛岡市玉山区(4月27日発生で約78ha、山田町・宮古市(5月14日発生で約33ha、葛巻町・岩手町(5月30日発生で約50〜60ha)と大規模なものが多く、東北六県の防災ヘリ、自衛隊ヘリ等が出動し消火活動を行ったが、鎮火まで数日を要している。

今後梅雨期に入るが、火の取り扱いには十分注意する必要がある。

今月の名木・巨木 19

(釜石市)

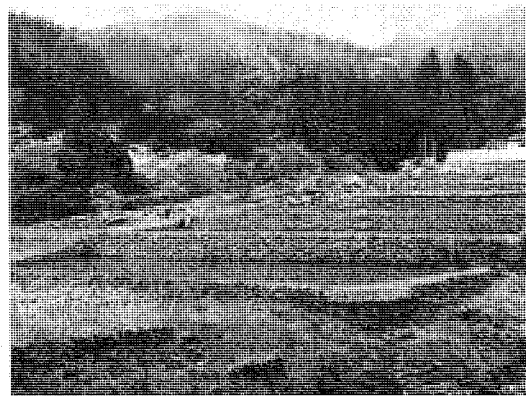
釜石市指定天然記念物 古里の御神楽スギ

指定：1969年8月22日

所在：釜石市橋野町古里

釜石市橋野町は、釜石市北部を流れる鵜住居川の上流に位置し、現存する日本最古の洋式高炉跡として世界遺産登録を目指す「橋野高炉跡」で知られている。

産直施設「橋野どんぐり広場」から県道35号線を西に向かい、御神楽スギの案内板から右手に進み杉林を抜けると、古里地区の美しい景観が広がっている。石積畦畔の案内板のある駐車スペースから地区の中心部に向かって歩き、案内標識に



石積畦畔

従って進んだ先にどっしりと構えているのが「古里の御神楽スギ」である。

樹高約30メートル、幹周り約6メートル、推定樹齢約400年以上現地案内板



御神楽スギ

よりとされ、県内でも有数のスギの巨木である。橋野地区には今から340年前、圧政に苦しむ村民のため命をなげだした男・古里嘉惣治と小屋野十三郎がいた。橋野地区は、かつては

凶作に苦しんできた土地であった。嘉惣治が肝入(現在の村長)だった当時、南部藩から当地に赴任していた鶏冠井助左衛門は、凶作でも容赦なく年貢を取り立てた。更には、古里地区の財産であるケヤキの木を伐採させ、盛岡への運搬を命じたという。その横暴に耐え兼ねた嘉惣治は、延宝2(1674)年、老名役(相談役)

の十三郎とともに藩主への直訴を執行する。この直訴により助左衛門は処刑され、村民は圧政から救われたが、嘉惣治と十三郎もまた直訴した罪で処刑された。嘉惣治24歳、十三郎54歳であった。二人の勇気ある行動は、今なお人々に感銘を与え続けている。

冗談欄 マスコットキャラ「洋ナシ」の正体

ゆるキャラというのが話題になって久しい。

現在、その数は2千体を超えると言われ、全く人の目に触れることなく、物置の中でホコリをかぶっているものもあるようだ。

そのような中でも人気があるのが、「ふなっしー」と「クマもん」である。

クマもんは熊本県のPRキャラクターで、クマをモデルにしておりその可愛らしさから、平成23年には人気ナンバーワンとなった。

登場した当初は痩せており、熊本県の臨時職員であったが、現在は、美味しいものを食べすぎて太った体型となり、身分も知事、副知事に次ぐNO3の地位で、熊本県しあわせ部長となっている。

一方、ふなっしーは千葉県船橋市のシンボルキャラクターで、名産品の梨をモチーフにしており、一市民が個人

的に作ったキャラクターである。中に入っている人間が話すことや俊敏な動きをすることで人気を博しているが、千葉県や船橋市当局は地域のキャラクターとしては認めていない。

多くのキャラクターは、動物や植物をモデルにしており、動物では猫、鳥、犬、熊などの人気が高く、植物ではイチゴや桃などの果物、トマトやニンジンなどの野菜の人气が高いようだ。

また、男と女では総じて男性は植物のキャラクターが、女性は動物のキャラクターが好きなようである。

世の奥様が井戸端ならず道端でキャラクターについて立ち話をしていた。「うちの旦那はイチゴ姫が好きなのよ。」「どうもうちのモモ姫が気に入っているみたい。」「うちの旦那はふなっしーが気に入っているようだけれど、梨はナシでも、絶対に洋ナシよ。そう「用無し」なのよ」ダツテ!

平成26年5月分の販売実績

樹種	合板用			その他 製材用等			計		
	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	7,659	89.6	142.3	3,784	111.4	131.6	11,444	95.8	138.6
カラマツ	1,796	131.1	32.4	2,906	115.8	327.0	4,703	121.2	73.1
アカマツ	2,982	86.8	120.0	264	77.6	75.0	3,246	86.0	114.4
その他針葉樹	0	*	*	184	93.8	192.5	184	93.8	192.5
広葉樹	0	*	*	365	68.4	423.8	365	68.4	423.8
合計	12,437	93.1	92.8	7,503	107.6	174.6	19,941	98.1	112.6

樹種	バイオマス用素材		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	963	241.3	6,257.1
カラマツ	691	714.7	*
アカマツ	264	1,890.6	201.1
合計	1,917	376.1	1,309.3

樹種	今年度累計			
	合板用 (m³)	その他 製材用等 (m³)	計 (m³)	バイオマス (t)
スギ	16,207	7,180	23,387	1,362
カラマツ	3,166	5,416	8,582	787
アカマツ	6,418	604	7,022	277
その他針葉樹	0	379	379	0
広葉樹	0	898	898	0
合計	25,790	14,478	40,269	2,427
目標達成率(%)	14.7	18.6	15.9	6.7
計画量	176,000	78,000	254,000	36,000

注)*印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【平成26年5月の需要動向】

- スギは製材向けの引き合いが落ち着き、集成材・合板向けは引き合いが続いている。
- カラマツは引き続き原木不足。よって高値を維持、今後もこの状況が続くと予想。
- アカマツは松くい虫被害対策に入るため伐採が制限。受入先も品質低下もあり制限。

落穂拾い

この数年来、わが国における森林・林業を取り巻く環境は、大きくかつ激しく変化しつつある。国内の人工林資源の成熟化を背景に、国産材の積極的な利用に対する国の誘導施策と相まって、原木需要側の製材・合板・集成材等の製造業における規模拡大や製造施設の新設等が顕著になるとともに、木質バイオマス発電所の新設が幾つか発現してきており、まだ計画中のものが数多くあるという。

ただ、バイオマスを燃焼させて発電のみだけをする場合には、熱効率は25%程度であるといわれており、考えようによっては余・廃熱が多すぎる。「せめて熱電併給をやってほしい」という学者がいるのもむべなるかな、と考えるのである。二、三日前の地元紙に、岩手県・東北地域において「木質バイオマス熱源活用で大規模園芸団地を造成」という記事が載っていたが、これはそは地域に根ざした木質バイオマス活用の好例であろう。大いに期待したい。

生産される素材や木質バイオマスは、それぞれ品質・規格等が異なり、それにともなって需要先も多様となるが、モノによっては需要先がなかったり、限定されたりする。このような状況がわが国においては長い間続いてきた。

しかし、ここに来て素材及び木質バイオマスの需要が広がる様相を示し始めた。これまた数日前の『林政ニュース』（隔週発行）に「セルロースナノファイバーで1兆円産業へ」産官学でフォーラム、2030年までに新市場という見出しで木質バイオマス新利用に関する記事が載った。「セルロースナノファイバーは、軽量でありながら鉄鋼の5倍以上の強さを持ち、熱による変形が少なく森林資源を有効活用できる。自動車部品をはじめとした高強度材料や食品・医薬品の増粘剤、フィルターなどの特殊材料に幅広く使用でき、産業界が実用化に向けた研究開発

を進めているというのである。落穂拾い子たちはよと興味を持ったので調べてみた。

セルロースナノファイバー(CNF)は、超極細木材繊維と呼ばれ、樹木の主成分であるセルロースから作られる。セルロースはこれまで紙の原料として使われてきており、この紙パルプの製造の場合セルロースの繊維幅が約20マイクロメートル(1マイクロメートルは1ミリの1/1000分の1)であるが、CNFの繊維幅は約3〜数十ナノメートル(1ナノメートルは1マイクロメートルの1/1000分の1)しかなく、髪の毛の数万分の1と極めて細いのである。また、CNFの特徴としては、超極細繊維で、比表面積(単位質量当たりの表面積)が大きく、軽量で高強度なこと、透明性(光が反射せずに透過する性質)が高いこと、熱に対して伸縮膨張し難く、酸素などをささぎる力が強いこと、水中で高い粘性を持つこと、そして環境にやさしいバイオマス素材であることなどがある。

期待される利用方法として、透明性や寸法安定性が高いことから電子機器に使われる「機能性シート」、比表面積が大きい性質を利用した各種産業用「フィルター」や食品などの「包装部材」、化粧品や食品「塗料」などの「機能性添加剤」、樹脂やゴムに混ぜると軽くて強くなることを利用した「自動車部品」等が考えられる。

樹木の木質部の主要成分は、セルロース、ヘミセルロース、リグニンであるが、なかでもセルロースは針葉樹・広葉樹ともに木質部のほぼ50%乾重量を占める。これまでもわが国は、木質セルロースを紙パルプ製造の原料として活用してきた長い歴史があり、セルロース抽出技術も高いものがあるので、CNFの開発・実用化への基盤は出来ていると考える。

これまで木材の多様な需要の新たな息吹について述べてきたが、川上すなわち、木材の供給側に立つ落穂拾い子は考え込んでしまった。「川上さん、大丈夫ですか?」